豊かな水土里を次世代に～土地改良・人・技術 ⑳

国営第1号干拓地の田園都市空間整備、京阪の台所を支える巨椋池農地防災事業

大塚　義人

住民参加による幹線排水路への植栽（水土里ネット巨椋池提供）

巨椋池（おぐらいけ）地区は京都府南部、1級河川「淀川（よどがわ）」（京都府では宇治川（うじがわ）と呼ぶ）左岸に位置する。ここにはかつて池というよりは湖といったほうが規模的にふさわしい「巨椋池」が存在したが、昭和初期のわが国初の国営干拓事業により豊かな田園地帯に生まれ変わった。

その後半世紀以上が経過、干拓地にかかせない排水システムが脆弱（ぜいじゃく）となり、集水域内の都市開発などにより低平地の農地や施設の湛水（たんすい）が増加したことから、平成9（1997）～18（2006）年度に排水機場の全面的な改修をはかる「国営巨椋池農地防災事業」が実施され、同16（2004）～27（2015）年度にかけ「国営附帯府営農地防災事業巨椋池地区」が続いている。

平成20（2008）年度第38回上野賞は「国営第1号干拓地における田園都市空間の整備――京阪の台所を支える巨椋池農地防災事業（国営・府営）――」に対して近畿農政局整備部、京都府農林水産部農村振興課、巨椋池土地改良区、巨椋池国営附帯府営農地防災事業推進協議会へ贈られた。

（本文中、氏名等敬称略）

※「上野賞」は日本の農業土木学の創始者ともいうべき上野英三郎博士の業績を称え昭和46（1971）年に農業土木学会（現・農業農村工学会）によって創設された。農業土木に関する新しい分野の発展に寄与した団体、自治体などを表彰する。

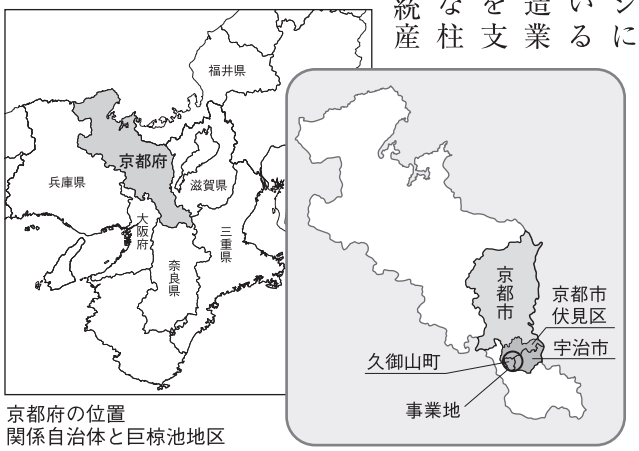
歴史・文化に加え、多彩な自然も魅力のひとつ

京都府は、北は日本海に面し、東は福井、滋賀、三重、南は奈良、西は大阪、兵庫の1府5県に接している。面積は4，613㎢。府人口は263万人、京都市にはその半数以上の147万人が暮らす。

近畿地方の中央から北西の日本海まで長さ約140kmと細長く伸び、おおまかに北部、中部、南部とわけることができる。府行政の広域振興圏としては北部が丹後、中丹、中部は南丹、南部は山城の各振興局が管轄し、政令指定都市の京都市は中部から南部の一部にかかる。

京都市、宇治市をはじめ府各地で多彩な歴史・文化、自然観光などが盛ん。平成20（2008）年府観光入込客数は約7,799万人、外国人宿泊数は95万人、観光消費額は7,063億円にのぼった。

平成22（2010）年の経済活動別府内総生産は10兆4,261億円、うちサービス業が21%、これに匹敵するのが製造業の20・8%、不動産業16・6%、卸売・小売業13・3%と続く。観光イメージに隠されているものの製造業も府経済を支える大きな柱であり、伝統産業を中心に多品種少量生産、高付加価値型の知識集約的製造業がその一翼を担う。



京都府の位置
関係自治体と巨椋池地区

主な地形と気象

府北部は日本海沿いのリアス式海岸と丹後山地、中部は丹波高原が多くを占め、由良川が北（若狭湾）へ向かい途中福知山盆地を、桂川が南下し亀岡盆地などの盆地を形成している。南部は桂川、宇治川、木津川が京都盆地（山城盆地）で合流し淀川となる。

森林面積は34万5,877ha、森林率は75・1%、府内に標高千mを越える高山はなく、河川は中部の丹波高原を分水嶺として日本海へ北流する由良川水系、太平洋へ南流する淀川水系などに分かれる。海と海岸線、低山地、高原、川、盆地など、変化に富みかつ豊かな自然は京都府の魅力のひとつとなっている。

北部は日本海側気候で冬季に豪雪地帯となる地域が多いが、日本海沿岸部は対馬暖流の影響で海洋性気候にあって比較的低温をまぬがれている。南部は晴天日数や日射量の多い瀬戸内式気候。ほかは内陸性気候、とくに盆地では風が弱く、夏と冬、昼と夜の温度差が大きい。

京都盆地京都市の1981～2010年間の平均気温はもっとも寒い1月が4・6℃、もっとも暑い8月が28・2度、年平均15・9℃、年間降水量は約1,491㎜。

良質な「野菜」と「米」生産が看板

平成21（2009）年の府農業産出額は681億円。内訳は野菜241億円、米178億円、鶏59億円、工芸農産物47億円、乳用牛41億円、加工農産物34億円など、野菜の産出額が米を大きく上回っているのが特徴。京野菜を中心にとくに良質な農林水産物を「京のブランド産品」として認証している。また食味を重視した生産米のなかでも「丹後産コシヒカリ」は、日本穀物検定協会食味ランキングで最高ランク「特A」の評価を何度も受けている。

同年の京都府の耕地面積は3万2,200ha、水田は約78%にあたる2万5,300ha。水田のうち米作は約62%の1万5,800ha、残りの約38%9,500haで水田を畑として利用する生産調整を実施、黒大豆、小豆、野菜などを生産している。野菜、果物を生産する畑は耕地面積の約22%にあたる6,940ha。

農家数は3万5,622戸、うち自給的農家は1万4,450戸、販売農家は2万1,172戸、農家人口は約8万人。総農家数、農業経営体ともに減少傾向にあり、土地持ち非農家が増加している一方、経営の規模拡大がすすむ。

観光客の多さを背景に6次産業化への取り組みも活発で、農産物加工、貸農園・体験農園、観光農園、農家レストランが増加している。

地域によっても主要農産物に傾向があり、北部は米や野菜、果物、お茶など、南に向かうほど米づくりが盛んになり、中部は米、ハウス野菜栽培に加えて小豆、大豆、利益の高いブランド野菜、中部の京都市から南部にかけてブランド野菜、花、宇治茶などの生産とともに京都や大阪などの大消費地に近いため「朝市」、「農産物直売所」に取り組むグループが少なくない。

滋賀県全域、三重県西部、京都府中部の集水地

国営農地防災事業が実施された巨椋池地区は、京都盆地の南部にあって京都市南部、宇治市西部、久御山町北東部にかけて広がる1,310ha。歴史的に京都府中南部は畿内「山城国（山背国）」といわれ、同地区はそのほぼ中央に位置する。

京都盆地のもっとも低地にあたり、かつては北から桂川、東からは宇治川、南からは木津川が集まり、東西4km、南北3km、周囲16km、面積約800ha、甲子園球場の約200倍もの広さの淡水湖「巨椋池」をはじめ、周囲の池、沼、潟とともに大きな遊水地を形成し、その水は淀川となって大阪平野、大阪湾へ向かっていた。

参考までに各河川の現在の姿を紹介しておく。北から流れる桂川は府中部の丹波高原に源を発し、高野川を加えた鴨川（加茂川）が合流する。三重県西部に源を発する木津川は名張川などを加え流れる。滋賀県全域を集水域とし琵琶湖から流れ出す唯一の河川「瀬田川」は、東から京都府へ入り「宇治川」と呼ばれ、山科川、さらには桂川、木津川を合流し「淀川」となる。

現在の巨椋池地区と各河川
（近畿農政局ＨＰから）

京都盆地の底にあたる巨椋池地区には滋賀県全域、三重県西部、京都府中部の河川が押し寄せていることになる。現在でも淀川の支流は965本と日本1多く、2位の信濃川880本、3位利根川819本を大きく上回っている。

太古の地球大変動の名残

太古、地球の寒暖にともない日本列島は海進、海退を繰り返していた。京都盆地は大半を占める巨大な古京都湖（古山城湖）、古大阪湾につながる古京都湾など、淡水湖・内海と何度も姿を変え、土地の隆起、土砂の堆積などにより水面が縮小、最低地に残されたのが巨椋池だった。

京都盆地には旧石器時代の遺跡はきわめて少なく、旧石器、縄文時代を通して狩猟採集生活に適していた周辺の丘陵、扇状地で遺跡が発掘されている。

水田稲作は瀬戸内海、大阪湾、淀川をさかのぼって伝播し、桂川流域でもっとも早くはじまった。時期は弥生時代（紀元前3世紀中頃～紀元3世紀頃まで）前期。このころから扇状地、微高地に集落が拡大していった。

巨椋池地区の南に接する微高地、久御山町市田斉当坊遺跡は弥生時代中期紀元前2～1世紀の大規模集落跡（竪穴式住居跡約50基・方形周溝墓約15基）の可能性が指摘され、さらに南には佐山遺跡、佐山尼外遺跡がある。沖積地のため土地は肥沃、湖沼や河川での漁労、水運、交易も可能とあって、比較的高い土地で周期的に襲ってくる水害を軽減できれば、魅力的な土地だったのだろう。

水域を変える巨椋池

古墳時代（3世紀中頃～6世紀末）の4～6世紀には有力豪族が登場、海抜20～30mの丘陵地で盛んに古墳が造営される。これに関係したのが秦氏を中心に朝鮮半島からの渡来系氏族ではないかといわれる。京都府中南部を拠点とした秦氏は、かんがい、治水、機織など先進的な技術を有し、5世紀後半に桂川治水のため葛野大堰を築き、京都盆地の開発をすすめた。

飛鳥時代（6世紀末～8世紀初め）に入ると、大化の改新（645年）の翌年に巨椋池東の宇治川渡河地点にはじめて架橋され、律令国家として出発するに際して東への交通を重視したことがわかる。巨椋池沿岸では漁を営む人々が暮らすと同時に、水の浸食を受けにくい地域では約100㎡を基準とした地割の条里制が実施され、道路、境界、溝渠などを整理配列した条里制集落が生まれていった。

地質調査などの分析では、巨椋池は時代によって規模を変え、縄文時代に広い水域はなく湿地帯が広がり、弥生時代には池と呼ぶ水域があったものの小さく、奈良時代（8世紀初め～8世紀末）には周辺山林の伐採により川へ土砂が流出し水域を大きくしたとされる。とはいえ河川が集中する地形から、いつの時代でも周期的な

洪水に見舞われていたことは想像に難くない。

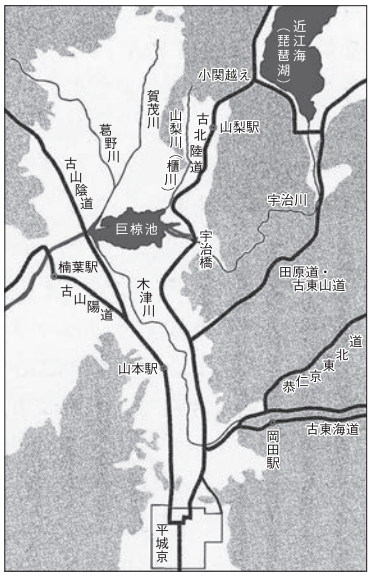
奈良、平安時代の交通の要衝

奈良時代に編纂された万葉集には「巨椋の入江 響むなり 射目人の 伏見が田居に 雁渡るらし」（巨椋池の水面がざわついている。伏見の田んぼに雁が移動するらしい）と詠まれている。当時は「巨椋の入江」と呼ばれていた。

奈良平城京の北には木津川があり、巨椋池を経て各地へ至る水上ルート、また平城京から北へ巨椋池まで距離にして約30km、巨椋池の東には古北陸道、西には古山陰道が位置し交通の要衝として、794年京都平安京に遷都されると平安京と平城京を結ぶ中間地点、都の南の軍事的防衛ラインとしてさらに重要度を増した。

平安貴族は、当時の行程で半日あまりの距離にある水の豊かな巨椋池周辺や宇治に別荘を建て、いわばリゾート地として利用、世界遺産「平等院」ももとは別荘のひとつであった。

宇治川筋では平安時代初期から水車揚水、巨椋池南岸地域は木津川から水が引かれたが、水はけが悪い低地は農耕には適さなかった。



奈良時代の官道（「夢よ咲け巨椋池」から）

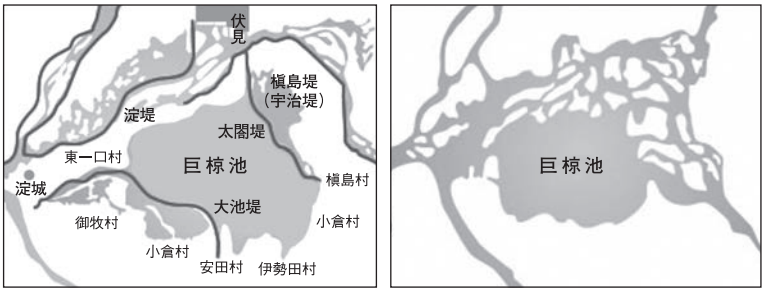
これらの動きはあったものの、洪水氾濫地帯の巨椋池と周辺地は、安土桃山時代に至るまで自然状態に任され大きな変化はなかった。

秀吉の利水・治水事業

関白豊臣秀吉は巨椋池から北約6kmに伏見城（桃山城）を築城、1594年に入城した。丘陵最南端にあって水上交通を利用できる巨椋池が近かったためである。また大名の屋敷地、商業地を建設、城下町ができあがっていった。

築城にあわせ秀吉は巨椋池と宇治川を切り離す大事業に着手。宇治川の流路を伏見へ迂回させ、槇島堤、太閤堤、淀堤、大池堤など巨椋池を囲むように堤防を建設、巨椋池は出口を淀付近の淀川（宇治川）のみとする貯水池となった。ちなみに伏見城に先立ち淀川の川中島に築かれた淀城に入城したのが淀殿（浅井茶々）である。

伏見は軍事を含め直接水上交通を利用でき、かつ洪水をまぬがれ、太閤堤のうえには京都と奈良を結ぶ大和街道がつくられた。のちの江戸時代初期には伏見と京都中心部を結ぶ運河「高瀬川」が開削され、江戸・大坂・西国―伏見―京を結ぶ水運の大動脈が誕生した。



秀吉築城以前と以後の巨椋池（近畿農政局ＨＰから）

宇治川の流路変更、築堤により大遊水地は宇治川右岸に木幡池、横大路沼など、左岸に巨椋池、さらに巨椋池は大池を中心に東の二の丸池、西の中内池、大内池の4つに分割された。

大坂の洪水調整と多発する水害

江戸時代に巨椋池は通称「大池」と呼ばれる。同時代絵図には、巨椋池の北に霞島新田、向島村、東に槇島村、小倉村、南に伊勢田村、安田村、市田村の地名が見える。霞島、向島、槇島などは遊水地に浮かぶ島洲だった名残、霞島新田は江戸時代の開拓田であり、田の付く地名は水田に因む。漁業も盛況で、大池の漁では伏見と巨椋池沿岸の3郷が「株」をわけあっていた。

秀吉による宇治川と巨椋池との分離により巨椋池への流入量は減少したが、出口の淀では桂川、宇治川、木津川が合流しつながっていた。淀川の増水時には、逆流によって巨椋池の水位は上昇、水害が沿岸農民、漁民を苦しめた。

もともと秀吉の事業は、伏見の水上交通の利便性向上と洪水防御に加え、淀川洪水時に巨椋池が溢れて洪水調節機能をはたし、下流域大坂の水害を軽減するという目的があったとされる。

江戸時代、巨椋池沿岸地域は何度も大洪水に襲われ堤防が決壊、とくに巨椋池の南、木津川

右岸で多く発生した。このため木津川を若干南下させる付替え、淀川の浚渫、堤防の一部改廃などが行われたが、当時の土木技術では江戸と並ぶ大都大坂を水害から守る方策がない以上、巨椋池の治水には限界があった。

単独湖となり新たな問題が発生

明治3（1870）年には洪水時の逆流を軽減するため木津川を南の下流部へ付替えたが、水害は続いた。当時は3年に1度の収穫があればよいほう、3年に1度は洪水があったという。

そこで淀川改修計画により明治29（1896）～43（1910）年まで、宇治・淀川上流の瀬田川の浚渫とその水をコントロールする瀬田川（南郷）洗堰の築造、伏見と淀の間の宇治川の下流部への付替えと堤防の新築、巨椋池からの排水路約4kmと樋門の新築などの改良工事を実施した。巨椋池は完全に宇治・淀川と分離され、逆流は防止されることになった。

しかし皮肉なことに単独湖となった巨椋池沿岸地域では――①淀川氾濫の直接的影響は受けなくなったが水害の脅威は残り、かつ排水の限界により湛水が常態化し営農環境が不安定化②宇治・淀川からの完全分離により魚類が回遊しなくなるとともに渇水時に水位が低下し、漁獲量が減少③渇水時の水質悪化で蚊が大量発生するようになりマラリアが度々流行――という農業者、漁業者ともに深刻な問題が生じた。

蓮の名所として知られた昭和5年頃の巨椋池（「大地への刻印」から）

これにより巨椋池干拓の機運が高まっていく。だが調査の結果、技術的には可能でも財政的に不可能との結論が出された。状況が一変したのは大正時代、政府は食糧問題の解決策として耕地拡張をめざした開墾助成法を公布し、府内では巨椋池が選ばれた。

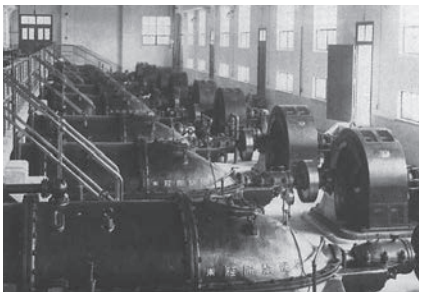
わが国初の国営干拓事業

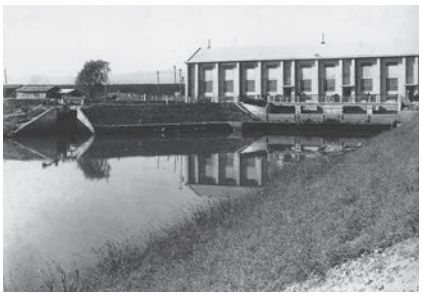
地元の熱心な運動もあって、干拓の是非論議、漁業者への補償問題などへの対応を経て、昭和7（1932）年国内初の国営干拓事業が認可され、干拓田の受け皿として「巨椋池耕地整理組合」（同27年巨椋池土地改良区へ）が設立された。翌年に工事着手し同15（1940）年完了、歩調を合わせ府営（7～14年度）、組合営（9～17年度）事業が実施された。4池をあわせた干拓時の湛水量は746万t、集水区域は53㎢。

干拓事業全体では、宇治川左岸に排水ポンプ10台（合計排水能力31・74㎥／S）を備えた「巨椋池排水機場」を建設、池の底だった800haを干陸化、うち634haを干拓田にすると同時に、用排水路129・3km、揚水機2台、道路119・2km、その他（橋梁50ヶ所、暗渠691ヶ所）を整備、周囲の既存農地1,260haの用排水改良を行った。

干拓田の多くは1反5畝（15a）区画。昭和38（1963）年ほ場整備事業制度化前は10a区画が主体であったことを考えると昭和初期としては画期的な大区画設計であり、畦畔をとり除くと30～45a区画、今日に比べても見劣りしないものだった。払い下げが完了したのは同23（1948）年。営農規模は1haから1・6haへと拡大、漁民を含め払い下げ農家690戸のうち約500戸は新たに生まれた自作農で、営農意欲は飛躍的に高まった。

舟を出して行う排水幹線の藻刈り（「六十年史」から）


旧排水機場のポンプ（パンフ「夢よ咲け巨椋池」から）


旧巨椋池排水機場（「六十年史」から）

巨椋池は先進的な優良田へと生まれ変わり、米の増産は4，500t、うち干拓地は2，800t、反収増は最大750kg／10aにのぼった。こうした増産が戦中戦後の食糧難に多大な貢献をはたしたことはいうまでもない。さらに当時国内最大の池沼干拓としてその後の国営事業、大規模土地改良事業の模範となった。

都市化による湛水、内水被害の増加

干拓後も水害がなくなったわけではなく、なかでも昭和28（1953）年の台風13号による被害は甚大だった。地域全体が水没、排水ポンプ自体が水に浸かって機能できず、水が引くのに約1ヶ月を要した。だが河川治水の進展は徐々に外水被害を減らしていった。

代わって増えたのが、都市化による排水量の増加、農地の宅地化などを背景とした降雨時の湛水、台風、集中豪雨時の内水（集水域内）被害である。ときに一体化する外水・内水被害がもっとも恐れられた。また、干拓時にもとの地形を極力変えなかったことから、旧池底地を中心にすり鉢状地形であったことも雨水がたまりやすい一因にあった。

昭和28年大水害の決壊口（「六十年史」から）

国営干拓事業完了の翌年の昭和16（1941）年に巨椋池流域は1，931戸、9，655人、それが平成7（1995）年には35，303戸、10万1，467人と、人口は10倍をはるかに超えた。蚕食（さんしょく）的な都市化のため下水処理施設の整備は十分ではなく生活排水は増加する。

一方で土地利用のほとんどを占めていた農地は減少、宅地、商工業地が増加、農地と宅地などの割合は半々まで近づきつつあった。しかも残った農地では畑作が徐々に増えていた。雨水を一時的に貯留、涵養する能力は地域全体がほぼ水田だった時代に比べ相当落ちる。

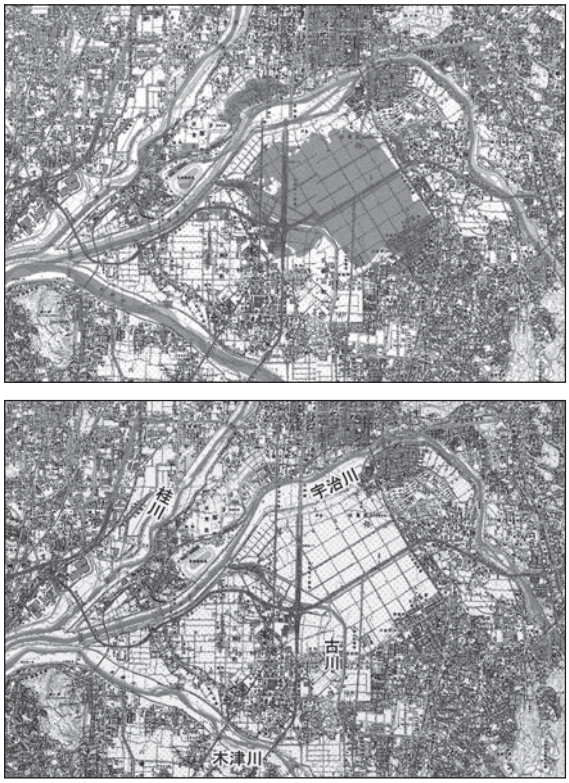
これに対して排水ポンプの増加、能力向上に取り組み、昭和48（1973）年には旧建設省が巨椋池排水機場に隣接して久御山排水機場を建設、従来の巨椋池地区排水域のうち都市区域が分離された。一旦は改善されたかに思えたが、都市化に追いつかず、また幹線排水路は干拓当時のままだった。排水システムそのものの脆弱性、経年変化は否めなかった。

国営巨椋池農地防災事業

「国営巨椋池農地防災事業」が実施されたのは平成9（1997）～18（2006）年度にかけて、築造以来60年以上を経過した巨椋池排水機場を全面更新するためである。

建設にあたっては地域環境の重視を徹底した。設計段階から、歴史的な背景、地域の象徴性、排水幹線路堤防の桜並木景観（京都の自然200選）との調和に配慮し、新排水機場建屋は和風建築を思わせる城門風の外観とした。施工中は地下水に含まれている溶解性鉄分を除き、工事による汚濁水が生態系、利水、景観などに影響を与えないよう処理した。また都市近郊にあって比較的民家に近いため騒音・振動対策にも万全を期し、常時用排水ポンプは低騒音・低振動のモーターとしたほか機場建屋壁面には防音パネルを施し、防火対策にも力を入れた。

新排水機場は、旧排水機場を稼働させたまま



巨椋池の変化（パンフ「夢よ咲け巨椋池」から）

建設するため隣接位置に整備。常時用排水ポンプ2台、洪水用排水ポンプ3台、計5台の排水能力は旧排水機場設置時に比べ2・5倍以上、国営防災事業前に比べ1・8倍以上にあたる80㎥／s、25mプールの水を約6秒で排水することができる。災害による停電を想定し、洪水用ポンプをディーゼルモーターとし、自家発電設備、燃料貯油槽などを備え、排水系統、施設・設備には水位計、監視用カメラが設置され、排水機場のポンプの運転状況とあわせて常時監視システムに組み入れられている。

上が淀川、左・旧排水機場、右・新排水機場（パンフ「巨椋池」から）

国営附帯府営農地防災事業巨椋池地区

排水路を全面改修する「国営附帯府営農地防災事業巨椋池地区」は、平成16（2004）～27（2015）年度完了予定で3地区にわけ実施されている。

排水路整備はあわせて7，255m。京都気象台のデータをもとに20年に1回程度発生すると予想される降雨（20年確率）、3日連続雨量260・6㎜を計画基準降雨とし、これによって一部排水域を分離した昭和48年以降に増加した湛水域は改善される。

府営事業も地域環境の重視は同じ。排水路工事では、水際の植生に対して寄せ石による淵、瀬づくり、魚類には寄せ石や魚巣ブロックによる棲みか、植生回復による産卵場所などの確保、流入水路への魚道設置、両生類には流入水路にはい上がり機能を設けるなど、水性生態系の保全をはかっている。

また「府民協働参画」の一環として、地域住民が排水路の整備内容や維持管理を検討、改修に反映させるワークショップを開催。これをきっかけに誕生した住民団体「巨椋水辺づくりプロジェクト」（会員40名）は巨椋池土地改良区と府内初の管理協定を結び、定期的な清掃、草刈りを実施、巨椋の水辺を回復させカワセミを呼び戻そうと活動を続けている。

幹線排水路沿いの桜並木と新排水機場建屋（パンフ「夢よ咲け巨椋池」から）

お魚引っ越し作戦（パンフ「夢よ咲け巨椋池」から）

施工に際しては「お魚引っ越し、生き物のすみか（淀みづくり）作戦」を実施、工事前に魚など生き物を移し、工事後再び戻ってこられる棲みかづくりに取り組んでいる。さらに年5回開催される「巨椋池たんぼ探検隊」には約50名の子どもと大人が参加、環境にやさしい米づくり体験、クリーン活動、生き物観察、地元の農家や生き物の専門家を交えた学習会や意見交換会が開かれている。

都市近郊の貴重な生態系保全田園地帯

国営、府営事業の実施は、直接的な――○洪水などによる被害の防止（災害防止）○水稲の湛水被害の防止、水田汎用化による畑利用機会の拡大（農業生産の維持・向上）○排水施設、設備の一新による維持管理費の低減化（維持管理費の節減）――などの効果に加え、地域の歴史や農業、排水システムの啓発活動、排水路への住民の主体的な関わりなどがあいま

稲刈り風景（パンフ「夢よ咲け巨椋池」から）

って、水質浄化、水性生物の保全をはじめ水辺、地域環境への住民意識の高まりにつながっている。

干拓地には約400種の植物、約180種の野鳥が生息し、排水路にもコイ、フナ、オイカワ、モツゴ、モロコなど多くの魚が棲む。前述したカワセミの復活も夢物語ではない。また旧池時代に「巨椋池といえば蓮」といわれるほど咲き誇っていた蓮も一部水田で見ることができる。まさに巨椋池地区は〝水と緑の豊かな都会のオアシス〟をめざすにふさわしい地といえる。

平成18年巨椋池地区の空撮（パンフ「巨椋池」から）

もちろん京阪の台所を担うという役割も重要だ。干拓地の多くを占めるのは平地型の効率的な稲作、山がちな京都府にあって貴重な農業生産拠点であり、近年は農道・用排水施設整備などの農業基盤整備事業により野菜、花きなどの付加価値の高い畑作、ハウス栽培も目立つ。周辺地域では淀大根（聖護院大根）に代表される伝統的な京野菜や生鮮野菜、環境保全型農業による米づくりも行われている。

地形的、歴史的経緯から巨椋池はなくなったが、京都府屈指の食料生産拠点、貴重な都市近郊の生態系、水辺、環境の保全地、田園景観地としての巨椋池はこれからも歴史を刻む。

【参考】○資料―夢よ咲け巨椋池（近畿農政局巨椋池農地防災事業所）、巨椋池、夢よ咲け巨椋池、歴史絵巻年表巨椋池（ともにパンフレット・巨椋池排水機場管理協議会）、巨椋池干拓六十年史（巨椋池土地改良区）、大地への刻印（社団法人土地改良建設協会20周年記念）、○参考ホームページ―近畿農政局、京都府、京都市情報館、京都大学、京都通百科事典、水土の礎「国内初の干拓事業」

誇りをもって「巨椋池」を守っていく

水土里ネット巨椋池は組合員2,275人、受益面積1,031ha。理事長茨木（いばらき）定夫さんに国営、府営農地防災事業についてうかがった。茨木さんは「まだ水害への懸念は残る」と話す。

「国営農地防災事業によって新しい排水機場ができ、排水能力は事業前の倍近い80㎥／sとなりました。新排水機場へ至る排水路は20年確率で3日連続雨量260.6㎜の降雨を計画基準に府営農地防災事業で工事が続いています。

つい最近も2日間で300㎜という大雨に見舞われ、そのときは洪水用ポンプを動員した新排水機場の排水によって事なきを得ましたが、以前のままだったら少なからず被害が出ていたのではないでしょうか。

国営、府営防災事業にはたいへん感謝しております。ただ農業者、地域としてはいつ襲ってくるかわからない水害が常に念頭にあり、一刻も早い府営事業の完了を願っていますし、最近は各地で記録的な豪雨が続き、20年確率の排水路設計にも懸念がないわけではありません。当地区の歴史は水害とともにあり、身体に染みついたその記憶が消えることはありません。

ですが、防災事業以前に比べれば一段と安全な環境になったことは確かですし、農業者はより安定した営農、住民はより安心できる暮らしになりました。

昭和初期の干拓後、京都府にあって平低地の当地区は中心的な生産地として農業、とくに稲作に取り組んできました。都市近郊という有利な立地を活かした京野菜、生鮮野菜などの畑作、ハウス栽培もみられます。防災事業をきっかけに、排水システムの地域貢献への住民理解が深まり、また、排水路などの水辺を中心に生息する多種多様な生きものの存在は、地域の環境を守っていこうという機運を高めています。水土里ネットも微力ながら住民活動を支援、参加しています。

巨椋池の歴史、巨椋池で農業ができることを誇りに思います。豊かな田園環境を守り後世に伝えていくことは農業者、水土里ネット、地域の責任であり、水害の一方でそれを乗り越えてきた歴史の継承でもあります。」